

# 援助要請意図を抑制するスティグマと自尊感情の関連

## —小学校高学年から中学生を対象にした質問紙調査より—

鳴門教育大学大学院学校教育専攻科 人間教育専攻 臨床心理士養成コース 指導教官 葛西 真記子  
土佐市立高岡中学校 教 諭 川村 紗也和

### 1 はじめに

近年のいじめの深刻化や不登校児童生徒の増加などに対応するため、文部科学省は平成7年度から、全国にスクールカウンセラーを配置し、その活用の在り方について実践研究を行ってきた。しかしながら、石隈・小野瀬（1997）が中高校生を対象に行った調査では、様々な悩みを抱えていながら、それを誰にも相談しない者が38%も存在したことが報告されている。

自分の力では解決できない困難な場面や問題に直面した個人が、他者に援助を求めることを援助要請という（相川，1987）。水野・石隈（1999）は、援助要請に影響を及ぼす変数を扱った諸外国の研究から得られた知見をもとに、これらの変数を①「デモグラフィック要因」、②「ネットワーク変数」、③「パーソナリティ変数」、④「個人が抱えている問題の深刻さ、症状」の4領域に分類した。また、竹ヶ原（2014）は援助要請研究の文献を展望し、個人内要因として性別、予期される利益とコスト、援助要請スキル、スティグマを指摘し、個人間要因として、援助要請者と援助者の性別、援助資源、援助要請者と援助者の双方に対する評価に分類している。

稲野邊・工藤（2018）は、中学生のスクールカウンセラーに対する援助要請行動の抑制要因を検討する上で、スティグマの概念を重要なものと考え調査した。その結果、悩みあり・援助要請なし群の「自分がスクールカウンセラーに相談をする」と「他人がスクールカウンセラーに相談をする」ことのイメージには違いがあることが分かった。つまり、「スクールカウンセラーに相談をする」ことは、他者に受け入れてもらえないマイナスなことだと自分では思っているが、一方、他者からはマイナスに思われていないということが明らかになった。また佐々木・水野・永井（2017）は、他者に受け入れられないと感じる「社会的スティグマ」が、社会に受け入れられないと感じることで生じる自己評価の低下である「自己スティグマ」を増大させ、さらに自己スティグマが専門的心理的援助要請態度を減退させるという、サービスギャップに繋がっている可能性を指摘している。しかし、スティグマをいつ頃から感じ始めるのかに関する研究は見つかっておらず、また、自尊感情と援助要請を抑制するスティグマの関連に関する研究も少ない。

### 2 研究目的

そこで本研究では、仮説①学年が高い方が自尊感情は低く援助要請を抑制するスティグマは高い、仮説②援助要請を行う相手によってスティグマの影響は異なる、の検証を行うことで、小学校高学年から中学校の間で援助要請の抑制要因のひとつであるスティグマと自尊感情に関連があるのか、また、スティグマと援助要請意図との関連を検討することを目的とした。自尊感情とスティグマの関連が明らかになれば、自尊感情が低い児童生徒、もしくは学年を中心に介入を行うことにより、以降の援助要請を促進させることができるのではないかと考えた。

### 3 研究内容

#### (1) 対象と方法

小学校、中学校各1校の小学5年生から中学3年生、計511名に対して質問紙調査を行った。この

うち、回答に不備のあった 25 名を除く 486 名を分析の対象とした (表 1)。

質問紙の構成については、以下の調査項目を用い、2019 年 11 月に実施した。

①フェイスシート：学年と性別について回答を求めた。

	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生	合計
男子	48(9.9)	32(6.6)	64(13.2)	59(12.1)	67(13.8)	270(55.6)
女子	37(7.6)	28(5.8)	48(9.9)	46(9.5)	57(11.7)	216(44.4)
合計	85(17.5)	60(12.4)	112(23.1)	105(21.6)	124(25.5)	486(100)

人数 (%)

②援助要請意図に関する項目：小中学生が自分で解決できない悩みを抱えた場合に、誰に援助やサポートを求めようと思うかという援助要請意図を測定するものとして、木村・水野 (2004) の被援助志向性尺度と、徳島県教育委員会 (2012) の『きみのことおしえて』シートを参考に作成した主要な悩み (小学生 6 つ、中学生 7 つ) を提示し、それが自分で解決できない場合誰に相談するかを尋ねるものである。具体的には「クラス (学級) のことの悩み (以下「学級での悩み）」、「友だちとの関わりなどの悩み (以下「友だちへの悩み）」、「先生への悩み」、「勉強への悩み」、「部活動の悩み」 (中学生のみ)、「家族や家での心配や悩み (以下「家での悩み）」、「自分の性格や身体の悩み (以下「性格身体の悩み）」という悩みを提示し、それぞれについて、スクールカウンセラー、先生、友だち、家族に相談するかどうか、相談する場合は項目を丸で囲んでもらう形で尋ねた。多重回答形式で回答を求め、どれにも当てはまらない場合は「誰にも相談しない」に丸をすることとした。

③自尊感情尺度：福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2009) が翻訳したローゼンバーグの自尊感情尺度 (自分への尊敬を問う項目を除く 9 項目) を使用した。この自尊感情得点で自尊感情が低い場合、自己否定、自己不満足等を表し、自分に対する評価が低いことを表す。評定は

1) 私 (ぼく) は、ほかの子と同じくらい大切な子どもだと思う
2) 私 (ぼく) には、いくつか良いところがあると思う
3) 私 (ぼく) は、ときどき「自分はダメだなあ」と思うことがある (*)
4) 私 (ぼく) は、友だちがやるのと同じくらいにいろいろなことができる
5) 私 (ぼく) は、あまり得意なことがない (*)
6) 私 (ぼく) は、いろいろなことをうまくやれると思う
7) 私 (ぼく) は、今の自分のままで良いと思う
8) 私 (ぼく) は、ときどき「役に立っていないなあ」と感じることもある (*)
9) 私 (ぼく) は、何をやっても失敗するのではないかと感じてしまう (*)

(\*) は逆転項目

「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらとも言えない」「かなりそう思う」「とてもそう思う」の 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど、自尊感情が高いことを示す (表 2)。

④スティグマに関する項目：他者に援助を求める際に感じるスティグマを測定するために、援助不安尺度 (木村・水野, 2004) から、汚名の心配に関する 4 項目 (相談することで汚名を着せられることを心配する 2 項目、秘密を守られるかや成績への関連を心配する 2 項目) と、筆者が作成した相談する自分への汚名を感じる 2 項目の、計 6 項目を使用した。援助を求める対象はスクールカウンセラーとした。評定は「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらとも言えない」「かなりそう思う」「とてもそう思う」の 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど、スティグマが高いことを示す (表 3)。

1) もし私 (ぼく) がスクールカウンセラーに相談したら、自分はできない人であると感じる
2) スクールカウンセラーに相談したことについて、秘密を守られるかどうか心配だ
3) もし私 (ぼく) がスクールカウンセラーに相談していることを身近な人 (友だち、家族) が知ったら、私 (ぼく) のことを弱い人間だと思うだろう
4) もし私 (ぼく) がスクールカウンセラーに相談したら、 <u>学校の成績に悪い影響があるだろう</u> (※小学生用：学校の成績が下がるだろう)
5) もし私 (ぼく) がスクールカウンセラーに相談していることを身近な人 (友だち、家族) が知ったら、私 (ぼく) のことをできない人だと思うだろう
6) もし私 (ぼく) がスクールカウンセラーに相談したら、自分は弱い人間であると感じる

## (2) 結果と考察

### ア 自尊感情とスティグマの関連

自尊感情尺度とスティグマ得点の記述統計量と Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。 $\alpha$  係数は自尊感情尺度では .80、スティグマ得点では .88 と、いずれにおいても十分な値が得られ、信頼性が確認された (表 4)。

表4 記述統計量とα係数

	全体 (n=486)	男子 (n=270)	女子 (n=216)	小学5年生 (n=85)	小学6年生 (n=60)	中学1年生 (n=112)	中学2年生 (n=105)	中学3年生 (n=124)
自尊感情得点 (α=.80)	26.34 (6.03)	26.61 (5.96)	26.00 (6.11)	25.24 (6.86)	29.37 (6.48)	26.26 (5.98)	25.23 (5.43)	26.64 (5.23)
スティグマ得点 (α=.88)	14.54 (5.51)	14.87 (5.57)	14.12 (5.43)	15.07 (5.69)	11.62 (5.31)	15.49 (5.50)	16.13 (5.79)	13.38 (4.45)

上段：M，下段：SD

相関分析の結果、自尊感情得点とスティグマ得点との間には中程度の負の相関が見られた(表5)。学年(5)×性別(2)の2要因分散分析の結果(表6)、自尊感情得点は小学6年生が一番高く、次いで中学3年生が高かった。また、スティグマ得点は小学6年生が一番低く、次いで中学3年生が低かったことから、自尊感情得点とスティグマ得点の負の相関と同様の結果が得られた。都築(2005)は、小学6年生の3学期から中学1年生の1学期にかけてを除き、自尊心は学年とともに低下していることを示していたが、本研究では、小学6年生と中学3年生が高く、小学5年生と中学2年生が低いという結果となった。加藤・太田・松下・三井(2018)が中学生を対象に行った調査では、中学入学時から2年の2学期にかけて自尊感情が低下し、その後上昇に転じている。都築(2005)と加藤ら(2018)の研究は縦断研究であり、横断研究であった本論文とは研究スタイルが異なるため結果が一致したとはいえないが、類似した研究結果が得られたといえるだろう。小学6年生と中学3年生で自尊感情得点が高いのは、それぞれの校種の最終学年であり最高学年であることの自覚や、進学のことなどを周囲と共同で考える機会が増えるためであると考えられる。

自尊感情得点とスティグマ得点に性差はみられなかったが、スティグマ項目ごとにみると「1)自分ではできない人だ」と「4)成績への悪影響」において、男子が女子より高かった。すなわち、女子よりも男子の方が相談する自分をできない人と感じており、相談することで成績に悪い影響があると感じていることが示された。男子が有意に高かった項目は、他の項目に比べて自分自身の能力に関わる項目であると考え、女子よりも男子の方が相談することで自分の能力が低いと思われてしまう、また自己評価も下がると考えてしまう可能性が示された。学年と性別の間に交互作用はみられなかった。

表5 自尊感情得点とスティグマ得点の相関

	自尊感情得点	スティグマ得点	Mean	SD
自尊感情得点	—		26.34	6.03
スティグマ得点	-.449***	—	14.54	5.51

\*\*\* p < .001

表6 学年と性別による各得点と分散分析結果

学年 性別	①小学5年生		②小学6年生		③中学1年生		④中学2年生		⑤中学3年生		主効果	交互作用	
	男子 (n=45)	女子 (n=37)	男子 (n=32)	女子 (n=28)	男子 (n=64)	女子 (n=48)	男子 (n=59)	女子 (n=46)	男子 (n=67)	女子 (n=57)			
自尊感情得点	25.15 (6.27)	25.35 (7.64)	28.31 (6.52)	30.57 (6.34)	26.72 (6.66)	25.65 (4.94)	26.49 (4.55)	23.61 (6.07)	26.84 (5.79)	26.40 (4.53)	6.18** ①,③,④,⑤<② ⑤<④	0.48	
スティグマ得点	15.29 (5.74)	14.78 (5.69)	11.81 (5.54)	11.39 (5.13)	15.09 (5.47)	15.23 (5.58)	16.71 (5.81)	15.39 (5.74)	13.64 (4.50)	13.07 (4.41)	9.07*** ②<①<③,④,⑤	1.69	
1)もし私(ぼく)がスクールカウンセラーに相談したら、自分ではできない人であると感じる	2.71 (1.32)	2.60 (1.12)	2.34 (1.15)	1.96 (1.11)	2.81 (1.08)	2.75 (1.04)	3.00 (1.02)	2.70 (1.15)	2.63 (0.98)	2.39 (1.01)	4.80** ②<①,③,④,⑤ ⑤<④	4.58*	女子<男子
2)スクールカウンセラーに相談したことについて、秘密を守られるかどうか心配だ	2.67 (1.46)	2.70 (1.33)	2.16 (1.22)	2.11 (1.29)	2.70 (1.23)	2.73 (1.30)	2.95 (1.06)	3.00 (1.45)	2.51 (1.15)	2.32 (1.14)	5.40** ②<①,③,④ ⑤<④	0.05	
3)もし私(ぼく)がスクールカウンセラーに相談していることを身近な人(友だち、家族)が知ったら、私(ぼく)のことを弱い人間だと思ってしまう	2.88 (1.27)	2.51 (1.28)	2.06 (1.24)	2.25 (1.24)	2.77 (1.08)	2.77 (1.12)	2.76 (1.12)	2.59 (1.24)	2.27 (0.95)	2.40 (1.10)	4.47** ②,⑤<①,③,④	0.15	
4)もし私(ぼく)がスクールカウンセラーに相談したら、学校の成績が悪くなる(※小学生用：学校の成績が下がるだろう)	2.13 (1.10)	1.97 (1.17)	1.47 (0.92)	1.54 (0.79)	2.30 (1.11)	2.00 (1.05)	2.54 (1.18)	2.13 (1.05)	1.88 (0.93)	1.42 (0.63)	10.62*** ②,⑤<①,③,④	6.90**	女子<男子
5)もし私(ぼく)がスクールカウンセラーに相談していることを身近な人(友だち、家族)が知ったら、私(ぼく)のことをできない人だと思ってしまう	2.50 (1.19)	2.54 (1.41)	1.84 (1.22)	1.71 (0.98)	2.55 (1.10)	2.44 (1.07)	2.75 (1.11)	2.44 (1.17)	2.22 (1.01)	2.26 (1.08)	6.18** ②<①,③,④,⑤ ⑤<④	0.78	
6)もし私(ぼく)がスクールカウンセラーに相談したら、自分ではできない人であると感じる	2.42 (1.20)	2.46 (1.33)	1.94 (1.27)	1.82 (1.09)	2.56 (1.22)	2.54 (1.22)	2.71 (1.22)	2.54 (1.22)	2.13 (1.13)	2.28 (1.01)	5.05** ②<①,③,④ ⑤<④	0.04	

上段：M，下段：SD

\*p < .05, \*\*p < .01, \*\*\*p < .001

自尊感情とスティグマの負の相関や、自尊感情得点が高い学年とスティグマ得点が高い学年は一致したことから、自尊感情とスティグマの関連はみられた。しかし、小学6年生と中学3年生が自尊感情が高く、スティグマは低いことから、学年が高い方が自尊感情は高く援助要請を抑制するスティグマは高いとした仮説①は支持されなかった。なお、スティグマに関しては、小学5年生の段階で感じていることが分かった。

## イ 援助要請意図と変数との関連

### (ア) 学年差・性差

学年差では、小学生は家族に、中学生は友だちに相談しやすいことが示された。先行研究においても、小学生は相談相手に主に保護者を（佐藤・渡邊，2013）、中学生に相談相手に主に友人を選択する（岩瀧，2008）ことが示されている。ソーシャルサポート研究でも、中学入学前後でサポート提供者が保護者から親しい友人に変化しているという報告もあり（尾見，1999）、本研究でもほぼ同様の結果が得られた。しかし、友人への相談が多くなる反面、友人に関する援助要請に関しては懸念・抵抗感が最も生まれやすいことが指摘されている（水野・石隈・田村，2006）。「家での悩み」と「性格身体の悩み」で、小学6年生を除く学年で友だちへの相談よりも誰にも相談しない割合が高かったことを考えると、学校内や友人関係など共通の人間関係や空間で抱く悩みは相談できても、私的な悩みは相談することに抵抗感が上がると考えられる。また、後藤・廣岡（2005）は中学生に対する調査で、深刻な悩みは家族への相談抵抗が最も高くなったことを示した。「家での悩み」も「性格身体の悩み」も、内容の程度はあれど人に言いにくい深刻な悩みに分類されるといえるだろう。深刻な悩みほど他者への援助要請を抑制

表7 悩みを抱えた際の相談相手について（学年）

	全体 (n=486)	小学5年生 (n=85)	小学6年生 (n=60)	中学1年生 (n=112)	中学2年生 (n=105)	中学3年生 (n=124)
クラス（学級）のこの悩み						
スクールカウンセラー	22(4.5)	7(8.2)	4(6.7)	7(6.3)	2(1.9)	2(1.6)
先生	105(21.7)	23(27.1)	23(38.3)	22(19.6)	15(14.3)	22(17.9)
友だち	273(56.3)	37(43.5)	36(60.0)	61(54.5)	61(58.1)	78(63.4)
家族	146(30.1)	29(34.1)	21(35.0)	29(25.9)	28(26.7)	39(31.7)
誰にも相談しない	115(23.7)	22(25.9)	11(18.3)	32(28.6)	27(25.7)	23(18.7)
友だちとの関わりなどの悩み						
スクールカウンセラー	16(3.3)	6(7.1)	1(1.7)	5(4.5)	3(2.9)	1(0.8)
先生	62(12.8)	15(17.7)	18(30.0)	11(9.8)	5(4.8)	13(10.5)
友だち	219(45.1)	18(21.2)	23(38.3)	55(49.1)	49(46.7)	74(59.7)
家族	160(32.9)	38(44.7)	28(46.7)	30(26.8)	32(30.5)	32(25.8)
誰にも相談しない	132(27.2)	26(30.6)	14(23.3)	33(29.5)	34(32.4)	25(20.2)
先生への悩み						
スクールカウンセラー	21(4.3)	7(8.3)	2(3.3)	7(6.3)	3(2.9)	2(1.6)
先生	28(5.8)	4(4.8)	5(8.3)	8(7.1)	6(5.7)	5(4.0)
友だち	275(56.7)	35(41.7)	29(48.3)	70(62.5)	62(59.1)	79(63.7)
家族	177(36.5)	34(40.5)	30(50.0)	41(36.6)	31(29.5)	41(33.1)
誰にも相談しない	127(26.2)	31(36.9)	16(26.7)	26(23.2)	29(27.6)	25(20.2)
勉強への悩み						
スクールカウンセラー	10(2.1)	4(4.7)	2(3.3)	3(2.7)	1(1.0)	0(0.0)
先生	124(25.5)	19(22.4)	16(26.7)	33(29.5)	16(15.2)	40(32.3)
友だち	247(50.8)	36(42.4)	31(51.7)	62(55.4)	49(46.7)	69(55.7)
家族	193(39.7)	37(43.5)	33(55.0)	42(37.5)	36(34.3)	45(36.3)
誰にも相談しない	115(23.7)	26(30.6)	14(23.3)	21(18.8)	29(27.6)	25(20.2)
部活動の悩み（※中学生のみ）(n=336)						
スクールカウンセラー	5(1.5)	—	—	2(1.8)	2(2.0)	1(0.8)
先生	43(12.8)	—	—	16(14.3)	10(9.8)	17(13.9)
友だち	184(54.8)	—	—	62(55.4)	51(50.0)	71(58.2)
家族	114(33.9)	—	—	37(33.0)	30(29.4)	47(38.5)
誰にも相談しない	98(29.2)	—	—	34(30.4)	37(36.3)	27(22.1)
家族や家での心配や悩み						
スクールカウンセラー	14(2.9)	4(4.7)	2(3.3)	5(4.5)	3(2.9)	0(0.0)
先生	34(7.0)	10(11.8)	9(15.0)	4(3.6)	3(2.9)	8(6.5)
友だち	201(41.4)	32(37.7)	31(51.7)	44(39.3)	43(41.4)	51(41.1)
家族	76(15.7)	11(12.9)	11(18.3)	15(13.4)	17(16.4)	22(17.7)
誰にも相談しない	217(44.7)	40(47.1)	21(35.0)	52(46.4)	48(46.2)	56(45.2)
自分の性格や身体の悩み						
スクールカウンセラー	14(2.9)	3(3.5)	4(6.7)	5(4.5)	2(1.9)	0(0.0)
先生	24(4.9)	3(3.5)	7(11.7)	5(4.5)	2(1.9)	7(5.7)
友だち	161(33.1)	15(17.7)	24(40.0)	37(33.0)	37(35.2)	48(38.7)
家族	170(35.0)	41(48.2)	30(50.0)	27(24.1)	30(28.6)	42(33.9)
誰にも相談しない	215(44.2)	38(44.7)	19(31.7)	59(52.7)	49(46.7)	50(40.3)

人数 (%)

表8 悩みを抱えた際の相談相手について（男女）

	男子 (n=270)	女子 (n=216)	χ <sup>2</sup> 値
クラス（学級）のこの悩み			
スクールカウンセラー	17(6.3) △	5(2.3) ▼	4.44*
先生	63(23.4)	42(19.4)	1.12
友だち	128(47.6) ▼	145(67.1) △	18.60***
家族	61(22.7) ▼	85(39.4) △	15.83***
誰にも相談しない	83(30.9) △	32(14.8) ▼	17.04***
友だちとの関わりなどの悩み			
スクールカウンセラー	11(4.1)	5(2.3)	1.17
先生	39(14.4)	23(10.7)	1.55
友だち	109(40.4) ▼	110(50.9) △	5.40*
家族	69(25.6) ▼	91(42.1) △	14.93***
誰にも相談しない	88(32.6) △	44(20.4) ▼	9.06**
先生への悩み			
スクールカウンセラー	15(5.6)	6(2.8)	2.21
先生	17(6.3)	11(5.1)	0.31
友だち	132(48.9) ▼	143(66.5) △	15.14***
家族	86(31.9) ▼	91(42.3) △	5.67*
誰にも相談しない	86(31.9) △	41(19.1) ▼	10.12**
勉強への悩み			
スクールカウンセラー	9(3.3) △	1(0.5) ▼	4.91*
先生	71(26.3)	53(24.5)	0.20
友だち	134(49.6)	113(52.3)	0.35
家族	86(31.9) ▼	107(49.5) △	15.68***
誰にも相談しない	69(25.6)	46(21.3)	1.21
部活動の悩み（※中学生のみ）			
スクールカウンセラー	1(0.5)	4(2.7)	2.61
先生	25(13.4)	18(12.1)	0.12
友だち	90(48.1) ▼	94(63.1) △	7.49**
家族	49(26.2) ▼	65(43.6) △	11.23**
誰にも相談しない	66(35.3) △	32(21.5) ▼	7.13**
家族や家での心配や悩み			
スクールカウンセラー	9(3.4)	5(2.3)	0.45
先生	20(7.4)	14(6.5)	0.17
友だち	98(36.4) ▼	103(47.7) △	6.25*
家族	47(17.5)	29(13.4)	1.48
誰にも相談しない	130(48.3)	87(40.3)	3.14
自分の性格や身体の悩み			
スクールカウンセラー	11(4.1)	3(1.4)	3.09
先生	16(5.9)	8(3.7)	1.26
友だち	79(29.3) ▼	82(38.0) △	4.10*
家族	79(29.3) ▼	91(42.1) △	8.74**
誰にも相談しない	131(48.5) △	84(38.9) ▼	4.51*

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

度数 (%)

△：有意に多い，▼：有意に少ない

すると考えられる。加えて、「学級での悩み」「勉強への悩み」では他の悩みに比べて先生に相談する割合が高くなっている。「学級での悩み」では特に小学5年生、小学6年生が高く、学級内でのトラブルを解決する資源として先生を活用していることがうかがえる。また、「勉強への悩み」では特に中学3年生が高く、次いで中学1年生が高くなっている。中学1年生は小学校よりも勉強内容が難しくなること、中学3年生は高校受験に向けて勉強への意欲が高まることにより、先生をサポート資源として選択するためだと考えられる（表7）。

悩みを抱えた際の相談相手について性差を分析した結果、「勉強への悩み」以外の悩みで友だちを、「家での悩み」以外の悩みで家族を相談相手に選ぶ割合が男子よりも女子の方が有意に多かった。また、「勉強への悩み」と「家での悩み」以外の悩みの誰にも相談しない割合は、女子よりも男子の方が多かった。三浦・坂野（1996）は、男子に比べて女子はストレスに対するコントロール感が高く、さまざまな対処を行うことを指摘している。このことから、女子は悩みを抱えたときの対処の1つとして友だちや家族に相談をしていると考えられる。教師やスクールカウンセラーに対する性差はほとんどみられなかった。永井（2009）は、親や友人などのインフォーマルな資源に対する援助要請に比べ、フォーマルな資源に対する性差はほとんど存在しない可能性を示しており、本研究もこの指摘を支持する結果となった（表8）。

#### (イ) 自尊感情との関連

援助要請意図と自尊感情得点の低中高3群との関連を分析した結果、「学級での悩み」の先生と家族、「勉強への悩み」「部活動の悩み」の先生で、中群が有意に少なく、高群が有意に多かった。また、「先生への悩み」の先生と「部活動の悩み」の家族で高群が有意に多く、「部活動の悩み」「性格身体の悩み」の誰にも相談しないで高群が有意に少なかった。「性格身体の悩み」のスクールカウンセラーは中群が有意に少なかった。他の悩みにおいても、有意差は出なかったものの高群が他の群に比べて先生に相談する割合が多く、誰にも相談しない割合は少なかった。木村・水野（2004）が大学生を対象に行った調査でも、自尊感情が高いほど友人や家族への被援助志向性が高いことが示されており、本研究も同様の結果を得られた。このことから、自尊感情が高いほど援助要請をするといえるが、一方で、中群において「勉強への悩み」を除く各悩みのスクールカウンセラーと、「先生への悩み」「性格身体の悩み」を除く各悩みの先生への援助要請の割合が他の群よりも低く、先行研究とは異なる結果となった。フォーマルな資源に対してはその専門性ゆえに、自尊感情が低い人も否定的評価をされることが少ないと考える可能性が示唆された。自尊感情が低い人の方が、苦痛を抱えていたり困りごとに対して対処しにくかったりすることを考えると、フォーマルな資源には自尊感情が高い人ほどではないが援助を要請できるといえるだろう。

#### (ウ) スティグマとの関連

援助要請意図とスティグマ得点の低中高3群との関連を分析した結果、「学級での悩み」「勉強への悩み」「部活動の悩み」の家族と「友だちへの悩み」の友だちにおいて高群が有意に少なく、「友だちへの悩み」「勉強への悩み」「部活動の悩み」「性格身体の悩み」の誰にも相談しないにおいて高群が有意に多かった。また、「学級での悩み」の家族と「友だちへの悩み」の友だちにおいて中群が有意に多く、「勉強への悩み」の誰にも相談しないでは中群が有意に少なかった。他の悩みにおいても、有意差は出なかったものの高群が他の群に比べて家族に相談する割合が少なかった。

本研究で使用したスティグマの質問項目はスクールカウンセラーへの相談に限定したものであったが、スクールカウンセラーや先生への関連はほとんどみられず、家族への相談や誰にも相談しないことへの関連が高いことが明らかになった。このことから、スクールカウンセラーに対するスティグマであっても援助要請そのものを抑制すること、また、家族への援助要請意図を抑制することが示され、援助要請を行う相手によってスティグマの影響は異なるという

仮説②は一部支持された。ではなぜ、スティグマが家族への援助要請への抑制につながったのだろうか。これには、これまでの家族への相談経験が影響を与えている可能性が考えられる。つまり、これまでに家族にあまり援助要請をしてこなかった、もしくは援助要請をしても受け入れられない、あるいは期待通りの結果が得られなかった経験が、援助要請を抑制しているとも考えられる。

#### 4 まとめ

本研究では、援助要請の抑制要因の一つであるスティグマに注目し、小学校高学年から中学校の間で自尊感情との関連や援助要請意図との関連を検討することを目的とした。その結果、自尊感情とスティグマは中程度の負の相関があることが示された。また、自尊感情得点が高い学年とスティグマ得点が高い学年が一致したことから、自尊感情とスティグマの関連を裏付けることができた。しかしながら、小学6年生と中学3年生が自尊感情が高く、スティグマは低いことから、学年が高い方が自尊感情は低く援助要請を抑制するスティグマは高いとした仮説①は支持されなかった。なお、スティグマに関しては、小学5年生の段階で感じていることが分かった。

今回の研究では、小学6年生は自尊感情が高いが、中学1年生では低くなっていること、また、反面スティグマは小学6年生は低いと中学1年生は高いことが明らかになった。都築(2005)などの先行研究からも中学入学を境に自尊感情が下がり始めることが示されている。このことから、スクールカウンセラーの介入を、中学1年生を中心に行う必要があると考えられる。近年、自尊感情の低さをネガティブなものとして捉えるのではなく、思春期の自尊感情の低さは適応的な発達であるとする研究(加藤ら, 2018)もある。しかし同時に援助要請を抑制するスティグマが高いことが本研究で示されたので、自尊感情が下がり始める頃にスティグマが上がり始める可能性があると考え、こういう時期こそスクールカウンセラーなどの専門家に相談することは恥ずかしいことではないことや、相談しても学校生活や成績に影響がないことをしっかりと啓発していく必要があるといえる。

援助要請意図と各変数の関連については、小学生は家族に、中学生は友だちに相談しやすいこと、また、男子よりも女子の方が援助要請をしやすいことが示され、先行研究と同様の結果が得られた。援助要請意図と自尊感情の関連については、援助要請が高い人は援助を求めやすいことが明らかになったが、悩みによってはスクールカウンセラーや先生への援助要請の割合が、自尊感情が高い人や低い人よりも中程度の人の方が低く、先行研究とは異なる結果となった。フォーマルな資源に対してはその専門性ゆえに、自尊感情が低い人も否定的評価をされることが少ないと考える可能性が示された。またスティグマと援助要請の関連では、スティグマが高い人は家族に援助要請をしにくいこと、また誰にも相談しない人の割合が高い傾向にあることが示され、援助要請を行う相手によってスティグマの影響は異なるという仮説②は一部支持された。スティグマによる家族への援助要請抑制には、これまでの家族への相談経験が影響を与えている可能性が考えられる。

本研究においては、スティグマの高い人は家族に援助要請をしにくくなること、また誰にも相談しない割合が高い傾向にあることが示された。教員やスクールカウンセラーはこのことを踏まえた上で、児童生徒の様子を観察することが大切になるといえる。そのためには、学校内でとったアンケートの数字や、学級や授業、その他さまざまな場面での児童生徒の様子で気づいたことなどを共有する必要がある。

また、悩みの中でも「家での悩み」と「性格身体の悩み」については、誰にも相談しないとした人の割合が他の悩みに比べてどの学年も高かった。私的で深刻な悩みほど相談しにくい傾向にあるといえるが、だからこそスクールカウンセラーがそういった悩みの相談窓口になれるよう学校全体への啓発を行い、スクールカウンセラーの認知を高めることが必要であるといえる。

今後の課題としては、3点挙げられる。第1に、調査対象学年の幅を広げることである。スティグマは小学5年生段階ですでに感じていることを考えると、今後の調査では小学3年生ごろ、もしくは全学

年のデータを取ることが望ましいと考える。第2に、悩みの有無やスクールカウンセラーの認知の有無の確認である。悩みの有無やスクールカウンセラーの認知と援助要請の有無の関連をみることで、より詳しい援助要請意図を測ることができると思われる。第3に、家族への介入である。本研究では、スティグマが家族への援助要請を抑制していることが示された。学校現場での児童生徒への介入にとどまらず、家庭への働きかけを行うことで、援助要請を行いやすい環境を作ることができると思う。

#### 引用文献

- 相川充 (1987) 「被援助者の行動と援助」 中村陽吉・高木修 (編) 「他者を助ける行動」の心理学 光生館
- 福岡県青少年アンビシャス運動推進室 (2009) 「平成20年度自尊感情調査結果について」
- 後藤安代・廣岡秀一 (2005) 「中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究」 三重大学教育実践総合センター紀要第25巻
- 稲野遼友・工藤浩二 (2018) 「中学生のスクールカウンセラーに対する援助要請を抑制する要因の検討」 東京学芸大学紀要総合教育科学系第69巻1号
- 石隈利紀・小野瀬雅人 (1997) 「スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究—子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より—」 文部省科学研究費補助金 (基盤研究(c)(2)) 研究成果報告書 (課題番号 06610095)
- 岩瀧大樹 (2008) 「中学生が抱える悩みおよび悩みに対する相談相手・相談抑制理由に関する研究—1」 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要第17巻
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 (2018) 「思春期になぜ自尊感情が下がるのか?—批判的思考態度との関連から—」 青年心理学研究第30巻
- 木村真人・水野治久 (2004) 「大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて—」 カウンセリング研究第37巻3号
- 三浦正江・坂野雄二 (1996) 「中学生における心理的ストレスの継続的变化」 教育心理学研究第44巻
- 水野治久・石隈利紀 (1999) 「被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向」 教育心理学研究第47巻
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 (2006) 「中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究—学校心理学の視点から—」 カウンセリング研究第39巻
- 永井智 (2009) 「小学生における援助要請意図—学校生活満足度, 悩みの経験, 抑うつとの関連—」 学校心理学研究第9巻
- 尾見康博 (1999) 「子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究」 教育心理学研究第47巻
- 佐々木悠人・水野治久・永井智 (2017) 「大学生の援助要請を阻害する要因の検討—スティグマが援助要請態度に与える影響の検討—」 大阪教育大学紀要第IV部門第65巻2号
- 佐藤美和・渡邊正樹 (2013) 「小学生の悩みとそれに対する援助要請行動の実態」 東京学芸大学紀要芸術・スポーツ科学系第65巻
- 竹ヶ原靖子 (2014) 「援助要請行動の研究動向と今後の展望—援助要請者と援助者の相互作用の観点から—」 東北大学大学院教育学研究科研究年報第62巻2号
- 徳島県教育委員会 (2012) 「「きみ(君)のこと おし(教)えて」シート—不登校の解決に向けて—」
- 都築学 (2005) 「小学校から中学校にかけての子どもの「自己」の形成」 心理科学第25巻2号